一七五一年越後高田地震史料・越後国頸城郡吉尾組（桑取谷）地震之節諸事亡所之品書上帳と越後国頸城郡高田領往還破損所絵図

矢田俊文・上田浩介

はじめに

本稿の目的は、寛延四年四月二六日（一七五一年五月二一日）に越後で発生した高田地震の基礎史料「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」（越後国頸城郡吉尾組（桑取谷）[1]地震之節諸事亡所之品書上帳）と越後国頸城郡高田領往還破損所絵図を紹介することである。

前近代の地震研究において、家屋倒壊率がわかる確実な史料を分析することはきわめて重要である。一七五一年に起こった越後高田地震の研究において、「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」（農林水産省農林水産政策研究所所蔵斉京氏文書）は、ひとつの文書で三一か村もの広大な地域の家屋倒壊率を導き出せる史料であり重要である。しかしながらこれまでは、『中頸城郡志』[2]所収の「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」を集計した数値資料が使われていて、正確な史料の検討が行われていない。また、『上越市史』の通史編では、本史料を使って各村の被害表が作成されているが[3]、『上越市史』の資料編には史料の翻刻がなされていない。よって本稿では、「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」の全文を翻刻[4]する。

一七五一年の越後高田地震では海辺の被害が著しかった。越後国関山（新潟県妙高市関山）にある天台宗寺院関山宝蔵院の日記[5]寛延四年四月二五日条には、荒井（妙高市新井）より下通りがとりわけ大地震で、高田（新潟県上越市高田）は半分家が潰れ、数えきれないほどの多くの人が死亡し、また、在々海辺は山崩れでおびただしい数の人が亡くなった、と記されている。越後国頸城郡高田領往還破損所絵図は地震による海辺の山崩れによる被害の基礎史料として従来から知られている史料である。この史料は上越市公文書準備係所蔵の史料で、『「日本の歴史地震史料」　拾遺二』[6]に高田領往還破損所絵図の写真を掲げ、文字情報が翻刻されているが、誤りや脱落などが多々あり文字の翻刻が不完全であるため、絵図のトレース図を作成し文字情報のすべてを掲げて紹介する。

一　越後国頸城郡吉尾組地震之節諸事亡所之品書上帳

「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」（越後国頸城郡吉尾組（桑取谷）地震之節諸事亡所之品書上帳）は、吉尾組の大肝煎斉京氏が吉尾組各村の地震被害をまとめた報告書である。本文書のうち家屋被害の記述に注目すると、被害

は皆潰・半潰・焼失・流失・山崩下・無難に分けて書かれていることがわかる。地震の揺れによって被害を受けた場合は、皆潰・半潰などという区分が通常であるが、本文書では皆潰・半潰だけではなく、流失・山崩下・流失等の区分をしている。吉尾組では、揺れによって家屋が被害を受けたのではなく、山崩れや流失により被害を受けた地域であったことがわかる。以下、全文を掲げる。

（表紙）
「　　（異筆）
　　「重用書類」

宝暦元年
地震之節諸事亡所之品書上帳

未
十一月　　吉尾組」

吉尾組上綱子村

一、高八拾六石九斗六升四合
　　内三石八斗六升四合　前々引
　　拾六石弐斗三升　当荒引
　　残高六拾六石八斗七升
一、家数拾七軒　内本棟拾軒
　　名子七軒
　　皆潰九軒
　　内半潰七軒
　　無難壱軒
一、人数百弐拾三人　内男七拾壱人
　　女五拾弐人　無難
一、神社堂無難
一、漆木五本倒木
　　同組中俣村
一、高三百四拾四石四斗壱合
　　内三拾八石六斗六升八合　年々引
　　五拾七石壱斗弐升三合　当荒引
　　残高弐百四拾八石六斗壱升
一、家数六拾六軒　内本棟四拾四軒
　　名子弐拾弐軒
　　皆潰拾三軒
　　内半潰三拾七軒
　　無難拾六軒
一、人数四百三拾弐人　内男弐百拾弐人
　　女弐百拾四人
　　内死者弐人女　社人弐人
　　僧四人
一、死馬壱疋
一、神社堂無難
一、社家壱軒半潰
一、寺壱軒半潰

同組横畑村

一、高五拾八石壱斗弐升四合
　　内弐拾六石弐斗九升壱合　年々引
　　七石壱斗三升五合　当荒引
　　残高弐拾四石六斗九升八合
一、家数弐拾五軒　内本棟拾四軒
　　名子拾壱軒
　　内皆潰拾軒
　　半潰拾五軒
一、人数百五拾三人　内男七拾弐人
　　女八拾一人　無難
一、神社堂無難

同組皆口村

一、高五拾弐石五斗六升三合
　　内拾七石三斗八升七合　年々引
　　七斗壱升四合　当荒引
　　残高三拾四石四斗六升弐合

一、家数拾軒　内本棟六軒 名子四軒
内皆潰四軒 半潰六軒
一、神社無難
一、社家壱軒皆潰
一、人数七拾五人　内男三拾四人 女四拾人 社人壱人
無難

同組谷内村

一、高拾九石五斗五升三合
内七石四斗五升四合 七斗五升九合
年々引 当荒引
残高拾壱石三斗四升
一、家数六軒　内本棟四軒 名子弐軒
内皆潰弐軒 半潰四軒
一、神社無難
一、人数四拾弐人　内男弐拾三人 女拾九人
無難

同組北谷村

一、高五拾四石壱斗四升四合
内三拾六石弐斗五升三合 弐石弐斗三升七合
年々引 当荒引
残高拾五石六斗五升四合
一、家数拾壱軒　内本棟七軒 名子四軒
内皆潰三軒 無難八軒
一、神社堂皆潰
一、人数七拾七人　内男三拾八人 女三拾九人
内死者男

同組土口村

一、高百拾石四斗三升三合
内弐拾七石三斗五升八合 拾六石壱斗三升六合
年々引 当荒引
残高六拾六石九斗三升九合
一、家数三拾五軒　内本棟拾八軒 名子拾七軒
内皆潰九軒 半潰拾七軒
一、神社堂半潰
一、社家壱軒半潰
一、寺壱軒　客殿半潰 庫理(ママ)皆潰
一、人数弐百拾人　内男九拾九人 女百五人
内死者弐人女　社人弐人 僧四人
一、死馬弐疋

同組増沢村

一、高九拾壱石壱斗三升
内三拾石五斗弐升八合 三拾四石四斗壱升七合
年々引 当荒引
残高弐拾六石壱斗八升五合
一、家数三軒　本棟
内皆潰壱軒 半潰弐軒
一、神社堂無難
一、人数拾七人　内男八人 女九人
無難

同組大渕村

一、高百拾五石七斗

内弐拾七石四斗弐升九合
四拾石壱斗弐升九合
残高四拾八石壱斗四升弐合　年々引
当荒引

一、家数弐拾七軒　内本棟拾六軒
名子拾壱軒
内山崩下三軒
皆潰弐軒
半潰六軒
無難拾六軒

一、神社堂無難

一、寺壱軒半潰

一、人数百六拾七人　内男七拾五人
女八拾九人
僧弐人
道心壱人
無難

一、漆木三拾四本　倒木

同組東吉尾村

一、高六拾六石五斗一升壱合
内拾壱石弐斗五升五合
三拾五石六斗一升五合
残高拾九石六斗四升壱合　年々引
当荒引

一、家数九軒　内本棟四軒
名子五軒
山崩下七軒
内皆潰壱軒
流失壱軒

一、神社山崩下

一、薬師堂無難

一、寺壱軒山崩下

一、人数四拾五人　内男弐拾人
女弐拾壱人
僧三人
内死者弐拾八人
男拾三人
内女拾弐人
僧三人

一、死馬四疋

一、御水帳亡失

一、漆木弐拾六本　倒木

同組西吉尾村

一、高百三拾壱石九斗三升九合
内弐拾五石四斗弐合
六拾五石九斗弐升三合
残高四拾石六斗一升四合　年々引
当荒引

一、家数弐拾弐軒　内本棟拾四軒
名子八軒
内山崩下五軒
皆潰後流失拾五軒

一、神社無難

一、観音堂山崩下

一、社家壱軒山崩下

一、寺壱軒半潰

一、人数百五拾三人　内男七拾六人
女七拾弐人
社人壱人
僧四人
内死者弐拾八人　内男拾五人
女拾弐人
社人壱人
怪我人三人男

一、漆木六拾本　倒木

同組横山村

一、高百四拾八石四斗壱升五合
内 三拾三石壱斗壱升三合
三拾八石四斗壱升七合
残高七拾六石八斗八升五合 年々引 当荒引

一、家数弐拾六軒 内 本棟拾三軒 名子拾三軒
内 山崩下九軒 皆潰後流失六軒 半潰六軒 無難五軒

一、神社半潰

一、堂無難

一、社家半潰 壱軒

一、寺壱軒半潰

一、人数百六拾四人 内 男八拾壱人 女七拾六人 社人弐人 僧四人
内死者弐拾三人 内 男十弐人 女十壱人
怪我人三人 内 男壱人 女弐人

一、死馬三疋

一、漆木五拾壱本 倒木

同組鳥越村

一、高八拾三石九斗四升五合
内 三石三斗弐升壱合 四拾壱石八升七合
残高三拾九石五斗三升七合 年々引 当荒引

一、家数拾七軒 内 本棟四軒 名子拾三軒

一、堂壱軒 山崩下
内 山崩下 拾壱軒 焼失 弐軒 流失 四軒

一、人数九拾弐人 内 男四拾四人 女四拾七人 座頭壱人
内死者壱人女 怪我人弐人男

一、死馬四疋

同組小池村

一、高三拾九石四升壱合
内 四石七升七合 廿三石壱斗五升六合
残高拾壱石八斗八合 年々引 当荒引

一、家数六軒 内 本棟四軒 名子弐軒
不残山崩ニ而潰

一、堂壱軒 皆潰

一、寺壱軒 皆潰

一、人数四拾九人 内 男弐拾壱人 女弐拾四人 僧四人
内死者壱人女 怪我弐人男

一、死馬弐疋

一、漆木三拾七本 倒木

諏訪分

一、高拾石弐斗七升六合
内 弐石弐斗七升九合 三石九斗弐升九石 年々引 当荒引

残高四石六升八合
一、家数弐軒　名子　但、山崩皆潰
一、神社　山崩潰
一、社家壱軒　山崩潰
一、人数拾九人　内男九人女八人社人弐人
内死者壱人男
一、死馬壱疋

同組北小池村

一、高弐拾八石五合
内三石四斗壱升壱合拾石五斗六升八合
残高拾四石弐升六合　年々引当荒引
一、家数八軒　内本棟三軒名子五軒
内山崩下弐軒流失壱軒半潰五軒
一、堂壱軒　無難
一、人数四拾人　内男廿三人女十七人　無難

同組山寺村

一、高六拾八石六斗三升弐合
内拾九石六斗七升九合三石三斗壱升三合
残高四拾五石六斗四升　年々引当荒引
一、家数拾九軒　内本棟九軒名子拾軒
内皆潰壱軒半潰三軒無難拾五軒
一、神社　無難
一、社家壱軒　半潰
一、人数百弐拾人　内男五十八人女六拾人社人弐人　無難

同組下綱子村

一、高四拾五石三斗九升七合
内拾弐石壱升四合十三石壱斗五升壱合
残高弐拾石弐斗三升弐合　年々引当荒引
一、家数拾三軒　内本棟六軒名子七軒
内半潰五軒無難八軒
一、神社堂無難
一、人数六拾九人　内男三十人女三十九人　無難

同組高住村

一、高百拾三石弐斗一升四合
内拾七石五斗五升九合廿壱石四斗弐升八合
残高七拾四石弐斗弐升七合　年々引当荒引
一、家数三拾三軒　内本棟拾七軒名子拾六軒
内皆潰三軒半潰六軒無難廿四軒
一、神社堂　無難

一、寺壱軒　半潰
一、人数百弐拾弐人　内男五十三人 女七十壱人
内死者壱人女　座頭弐人 僧五人 道心壱人

同組中桑取村
一、高三拾石九斗弐升
内壱石三斗 五石八斗弐升八合
残高弐拾三石七斗九升弐合　年々引 当荒引
一、家数拾六軒　内本棟七軒 名子九軒
内半潰五軒 無難拾壱軒
一、人数九拾八人　内男五十弐人 四十六人　無難

同所孫三郎分
一、高弐拾九石八斗六升七合
内弐石壱斗五升 八石四斗七升
残高拾九石弐斗四升七合　年々引 当荒引
一、家数六軒　内本棟四軒 名子弐軒
内皆潰壱軒 流失壱軒 半潰壱軒 無難三軒
一、堂壱軒　無難
一、人数三拾七人　内男拾七人 女弐十人　無難
一、漆木六本　倒木

同組三伝村
一、高五拾八石六斗五升三合
内四斗九升弐合 廿五石五升四合
残高三拾三石壱斗七合　年々引 当荒引
一、家数拾八軒　内本棟九軒 名子九軒
内皆潰五軒 半潰十三軒
一、神社　無難
一、人数百三拾七人　内男六十四人 女七十三人　無難

同組花立村
一、高弐拾六石四斗九合
内壱石九斗壱升 五石九斗六合
残高拾八石五斗四升三合　年々引 当荒引
一、家数八軒　内本棟六軒 名子弐軒
内半潰四軒 無難四軒
一、神社堂　無難
一、人数五拾五人　内男廿九人 女弐十六人　無難

同組戸野村
一、高四拾五石九斗五升五合
内壱石四升壱合 十九石四斗四升九合
残高弐拾五石四斗六升五合　年々引 当荒引
一、家数拾五軒　内本棟八軒 名子七軒

内皆潰 四軒
半潰 九軒
無難 壱軒

一、神社堂　無難

一、人数八拾三人　内男四拾人
女四拾三人　無難

同組鍛冶免分

一、高拾七石三斗六升三合
内四石五斗四合　当荒引

残高拾弐石八斗五升九合

一、家数五軒　内本棟 弐軒
名子 三軒

内皆潰 壱軒
半潰 四軒

一、堂壱軒　無難

一、人数三拾七人　内男拾四人
女弐拾三人　無難

同組長浜村

一、高百四拾石三斗壱升九合
内六拾壱石九斗九升七合　当荒引 年々引 〃〃

残高七拾八石三斗弐升弐合

一、家数七拾軒　内本棟廿七軒
名子四拾三軒

内皆潰 三拾軒
半潰 拾弐軒
無難 弐拾八軒

一、神社　無難

一、寺壱軒　皆潰

一、同壱軒　半潰

一、人数四百七人　内男弐百弐人
女百九拾九人
僧六人
社人弐人　無難

同組有間川村

一、高百拾七石壱斗壱升七合
内拾弐石四斗九升八合　年々引
三拾九石六斗七升壱合　当荒引

残高六拾四石九斗四升四合

一、家数三拾九軒　内本棟弐十八軒
名子拾壱軒

内山崩下 九軒
皆潰 三拾軒　不残流失

一、神社　無難

一、寺壱軒　但堂半潰
庫理皆潰

一、御高札場并御橋流失

一、人数弐百八拾四人　内男百三十八人
女百四十三人
僧五人

内死者四拾五人
怪我人拾人男女

内男拾八人
女廿七人

一、死馬九疋

同組丹原村

一、高五拾弐石六斗八合
内壱斗三升三合　年々引
拾七石三斗弐升一合　当荒引

残高三拾五石壱斗五升四合

一、家数拾八軒　内本棟九軒
名子九軒

内皆潰 五軒
半潰 弐軒
無難 拾壱軒

一、神社　無難

一、人数百拾人　内男五十六人 女五十三人 禅門壱人　無難

鍋ヶ浦村

一、高五拾三石七斗五升九合　内六石四斗壱升　当荒引

残高四拾七石三斗四升九合

一、家数拾三軒　内本棟六軒 名子七軒　皆潰六軒 半潰三軒 無難四軒

一、神社堂　無難

一、御高札場　山崩

一、人数九拾六人　内男五十六人 女四十人　内死者弐人　内男壱人 女壱人

同組吉浦村

一、高七拾九石壱斗八升　内拾七石弐斗弐升壱合　当荒引

残高六拾壱石九斗五升九合

一、家数弐拾六軒　内本棟拾四軒 名子拾弐軒　皆潰六軒 半潰七軒 無難十三軒

一、神社　無難

一、御橋壱ヶ所震落

一、人数百四拾五人　内男七十弐人 女七十三人　内死者弐人男

同組条屋原村

一、高四拾六石八斗八升八合　内拾弐石六合　当荒引

残高三拾四石八斗八升弐合

一、家数拾弐軒　内本棟六軒 名子六軒　皆潰七軒 半潰弐軒 無難三軒

一、神社　皆潰

一、御橋壱ヶ所震落

一、人数七拾七人　内男四十弐人 女三十五人　無難

同組下宇山分無村立

一、高五拾五石九斗弐升九合　御料 御私領　所々ゟ懸持

内弐拾石七斗三升五石　当荒引

残高三拾五石壱斗九升四合

同組上宇山分無村立

一、高弐拾石九斗三升四合　右同断懸持

内六石五斗　当荒引

残高拾四石四斗三升四合

同組小池新田無村立

一、高拾弐石八斗四升九合　　不残当荒引

鳥越村ゟ懸持

同組中桑取新田無村立

一、高弐拾壱石四斗五合　長昌寺（小池村）懸持

内拾九石八斗四升六合　　年々荒

残高壱石五斗五升九合

右之通、当四月地震ニ而村々崩所如此御座候、　田畑人家

宝暦元年　　吉尾組大肝煎

未十一月　　斎京三□

（裏表紙）

「醫醫師」

二　越後国頸城郡高田領往還破損所絵図

越後国頸城郡高田領往還破損所絵図（高田領往還破損所絵図）は、一七五一年の高田地震により破損した高田領内の往還の筒石村（新潟県糸魚川市筒石）から居田（上越市居多）までの間を調査し、その結果を彩色の絵図にしたものである。凡例では海は青色が塗布されるとあるが、そのとおりではなくて省略されていることから、本絵図は越後国頸城郡高田領往還破損所絵図の写しであると思われる。

高田地震による山崩れについては名立崩れ[7]がよく知られているが、本絵図は高田領を描いた絵図なので、領外の名立崩れは描かれていない。さらに、往還の破損状況を記した絵図なので桑取谷等往還から外れた地域の被害状況は記されていない。また一章で紹介した「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」に出てくる家屋被害の情報はほとんど記されない。

例えば、長浜村（上越市長浜）の場合、本絵図には何の被害もなかったかのように長浜の町並みが描かれているが、「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」によると長浜村も相応の被害を受けていた。長浜村の家屋被害は全壊率四三％、全半壊率六〇％であった。[8]

しかし、山崩れで往還道が押し出されたありさまを描いた箇所とは異なり、長浜村の町並みは何の被害も受けていないように描かれていることは重要である。これは、長浜村とその付近では山崩れ等による往還道の被害がなかったことを表現しているものと考えられる。長浜村は家屋被害はあったものの、往還が被害をうけるような地盤変化がなかったことを示していると考えてよい。

本絵図は往還の被害状況をまとめた絵図なので、往還の被害についての記述は詳しい。道・橋の情報も詳細で、地震後存在した道とかつて存在した道を描きわけている。

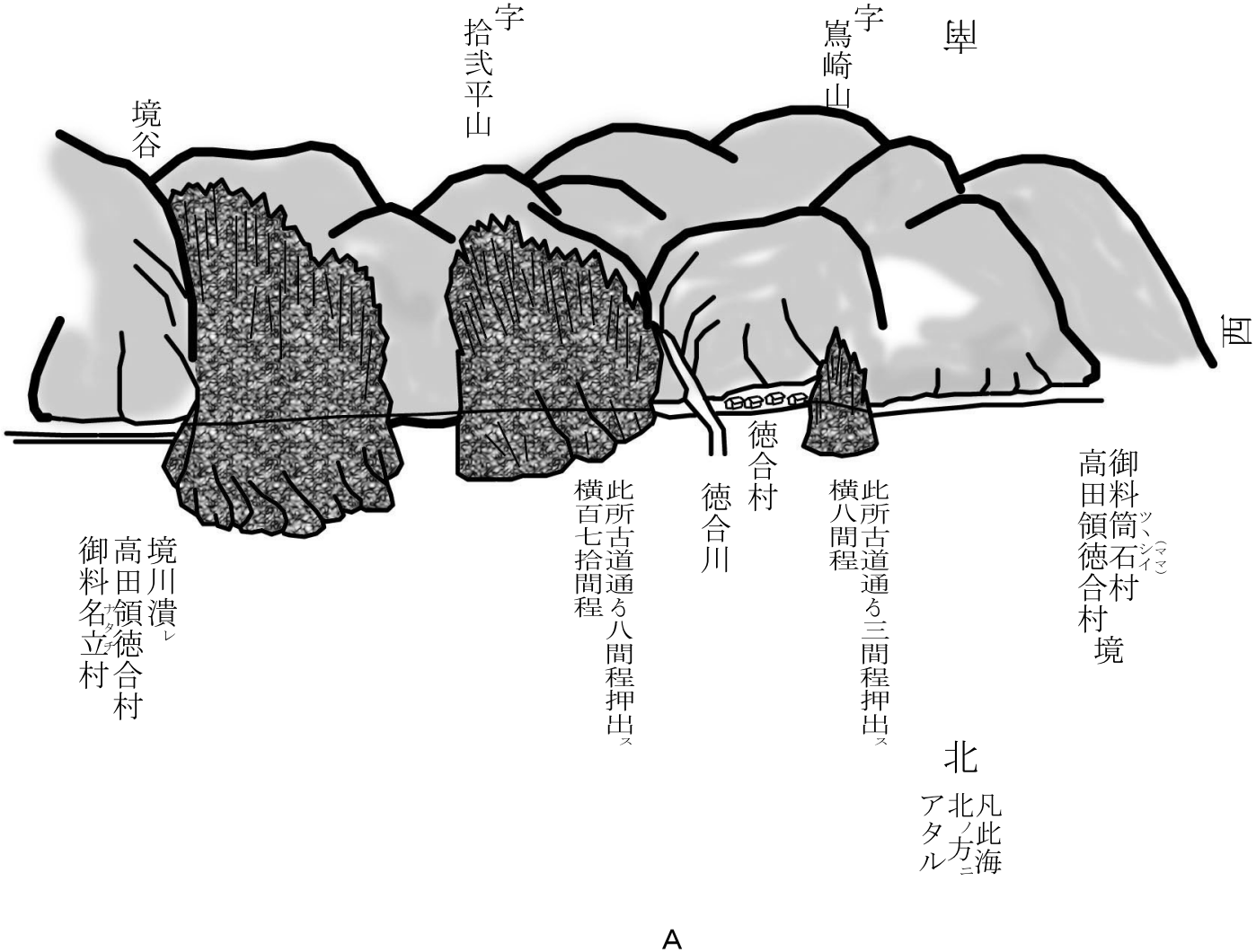
被害を受け村全体が河原になってしまった有間川村（上越市有間川）については家を全く描かず、もと村があった箇所に「此所宿中河原ニ成ル」と記述している。本絵図には、このような被害を受けた原因について、「有馬（間）川村ヨリ二十丁上、中桑取村ゟ山段々十丁程抜押出ス、依之、水堰元ノ川尻山ニ成故、村中江水一度ニ流出、宿中川ニ成、有馬川通山ニ成ル」と記している。有間川村よりも二〇町上の中桑取村から山が段々一〇町ほど抜け押し出した。これによって水が堰とめられ元の川尻が山になったため、村に水がいっきに流れ出し、有間宿は川となり、有間川が山になってしまった、とある。山崩れにより川が塞き止められその水が有間川村を襲い壊滅させてしまったと記しているのであ

る。このように、本絵図を細かく見ていけば往還とその付近の被害がさらに理解できる。

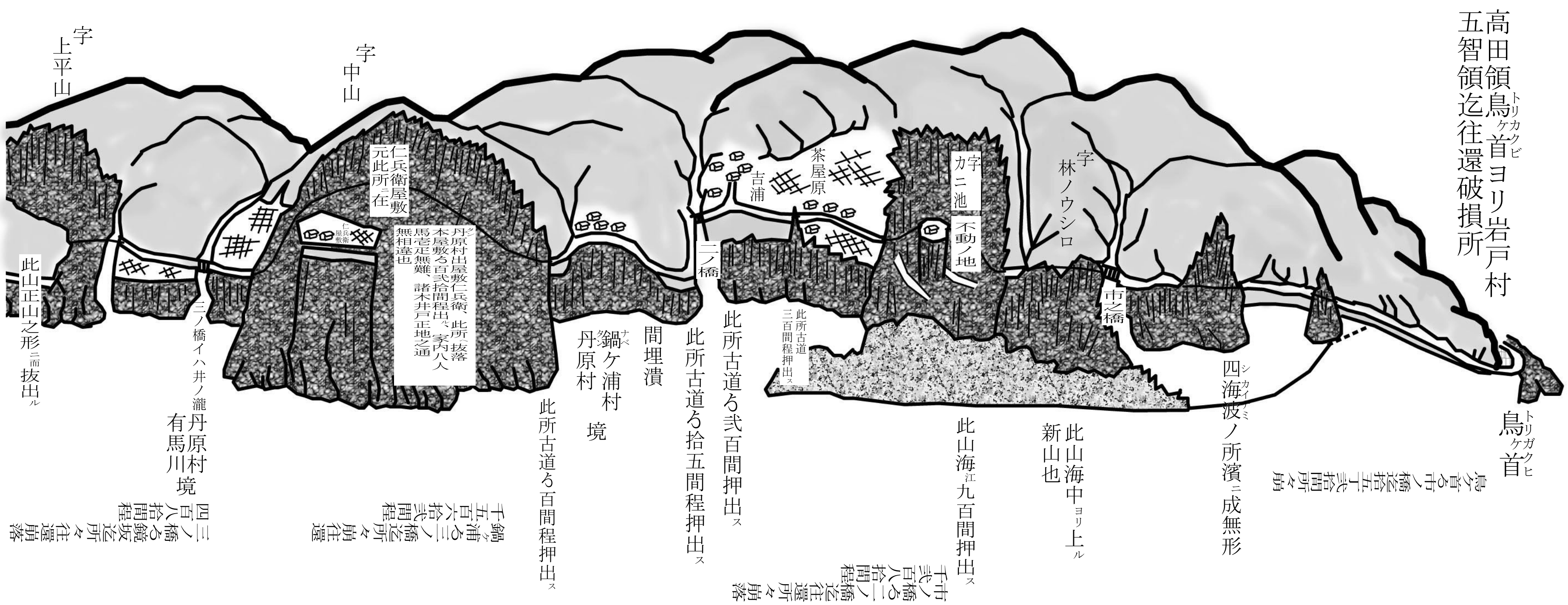
以下、本絵図全体のトレース図と翻刻した文字を掲げる。

E
D
C
B
A

越後国頸城郡高田領往還破損所絵図
御料筒石村ゟ居田迄之間



此間ニ御料名立小泊之宿有之、地震之節
小泊山下ニ成、海江突出シ、人死夥敷有之由



高田領鳥首ヨリ岩戸村
五智領迄往還破損所
字上平山
字中山
仁兵衛屋敷
元此所ニ在
字カニ池
不動ノ地
字林ノウシロ
茶屋原
吉浦
二ノ橋
市之橋
此山正山之形ニ而抜出ル
三ノ橋イハ井ノ瀧
丹原村
有馬川境
鍋ケ浦村
丹原村境
間埋潰
此所古道ゟ百間程押出ス
此所古道ゟ拾五間程押出ス
此所古道ゟ弐百間押出ス
此所古道三百間程押出ス
此山海江九百間押出ス
此山海中ヨリ上ル新山也
四海波ノ所濱ニ成無形
鳥首

B

有馬三嶽ゟ入ヲ三之浜ゟ拾丁程有
古道通ゟ海四丁程東西

C

宇
タウガクボ
宇
横ケ
大清水
此所古道る九拾間程押出ス
此所古道る四百三拾間程押出ス
此所古道る七拾間程押出ス
此山正面形ニテ抜下ル
此山ア此辺生タ所在村ル
此所古道る弐百間程押出ス
此所古道る百八拾間程押出ス
荒手川
長賀村境
此所古道る八丁程押出ス
宇
タウス
長賀村
呂宮境濱沢無鱗
塩濱
宇
袖山
宇
フタイ
此所古道る六丁程押出ス
宇
抜間
フタネ川
地此山中山崩落入

D

寛延四未年四月廿五日夜丑ノ下刻大地震ニ而北陸道大破

鳥首ヶ岩戸村迄古道通百三拾弐町程

E

おわりに

以上、「宝暦元年地震之節諸事亡所之品書上帳」（越後国頸城郡吉尾組（桑取谷）地震之節諸事亡所之品書上帳）と越後国頸城郡高田領往還破損所絵図を紹介した。この二つの史料から一七五一年の越後高田地震による吉尾組（桑取谷）や高田領の往還とその付近の被害状況が詳細に理解することができる。この二つの史料を使用してすでに家屋被害率を検討し、震源域の再検討を行っている。[9]

紹介した史料は家屋被害率や震源域の研究だけではなく、さまざまな地震研究に役立てることができると考える。本稿では文字の翻刻を中心とした史料の紹介に終わっている。それぞれについて詳細な検討については今後の課題としたい。

註

（1）吉尾組には長浜村・有間川村など海辺の村も含むので桑取谷と記すべきではなかろうが、吉尾組のおおよその地域を明示する名称として使用している。また、本論文の名称も史料に付された名称とは異なるが分かりやすさを考慮して使用した。

（2）新潟県中頸城郡教育会編『中頸城郡志』第四巻、新潟県中頸城郡教育会、一九四〇年

（3）太田一成「宝暦元年の大地震」『上越市史　通史編3　近世一』上越市、二〇〇二年

（4）本稿では、上越市文書法務課公文書館準備係架蔵マイクロフィルムを使用した。

（5）妙高市教育委員会編『妙高山雲上寺宝蔵院日記』第一巻、高志書院、二〇〇八年

（6）宇佐美龍夫編『「日本の歴史地震史料」拾遺二』二〇〇二年、日本電気協会

（7）月橋正樹『名立崩・親不知・上路の山姥』新潟県糸魚川町国民学校長会、一九四二年など。

（8）矢田俊文・卜部厚志「一七五一年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」『資料学研究』八号、二〇一一年

（9）矢田俊文・卜部厚志前掲注（8）「一七五一年越後高田地震による被害分布と震源域の再検討」

［付記］本論文作成にあたっては、上越市文書法務課公文書準備係の皆さまにお世話になりました。感謝いたします。